

しんぱん
新版

しどうようもんしゅう
指導要文集

だいいっしょう

第一章

しんじん

信心の基本

きほん

こうせんるふ

広宣流布

こくどみだ

のち

じょうぎようとう

しょうにんしゅつげん

かくのごとく国土乱れて後に上行等の聖人出現し、

ほんもん

みつ

ほうもん

こんりゅう

いちしてんしかいいちどう

本門の三つの法門これを建立し、一四天四海一同に

みようほうれんげきよう

こうせんる

ふうたが

妙法蓮華經の広宣流布疑いなきものか。

ほつけしゅようしよう

008 法華取要抄

こうせんる

広宣流布 159 ページ 6 行

か びやくほうおんもつ つぎ ほけきよう かんじん

ただし、彼の白法隠没の次には、法華經の肝心たる

なんみようほうれんげきよう だいびやくほう いちえんぶだい うちはちまん くに

南無妙法蓮華經の大白法の、一閻浮提の内八万の国あ

くにぐに はちまん おう おうおう しんか

り、その国々に八万の王あり、王々ごとに臣下ならびに

ばんみん いまにほんこく みだしようみよう ししゆ くちぐち とな

万民までも、今日本国に弥陀称 名を四衆の口々に唱うる

こうせんる ふ たも

がごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

せんじしやう

(009 撰時抄

こうせんる ふ

広宣流布 164 ページ 4 行)

こくしゅとう

諫

もち

りんごく

かれがれ

国主等そのいさめを用いずば、隣国におおせつけて彼々の

くにぐに

あくおう

あくびくとう

責

ぜんだいみもん

国々の悪王・悪比丘等をせめらるるならば、前代未聞の

だいとうじよう

いちえんぶだい お

とき

にちがつ て

大鬪諍、一閻浮提に起こるべし。その時、日月の照らす

してんげ

いっさいしゅじよう

くに

惜

ところの四天下の一切衆生、あるいは国をおしみ、ある

み

いっさい

ぶつぼさつ

祈

掛

いは身をおしむゆえに、一切の仏菩薩にいのりをかくとも

験

か

憎

ひと

しょうそう

しん

しるしなくば、彼のにくみつる一りの小僧を信じて、

むりよう

だいそうとう

はちまん

だいおうとう

いっさい

ばんみん

みな

こうべ

ち

無量の大僧等・八万の大王等・一切の万民、皆、頭を地

付

たなごころ

あ

いちどう

なんみようほうれんげきよう

唱

につけ 掌を合わせて、一同に南無妙法蓮華經となう

べし。

(
009
撰時抄 せんじしやう

広宣流布 こうせんるふ
165
ページ
4
行)

あん

だいじつきよう

びやくほうおんもつ

とき

つ

これをもつて案ずるに、大集経の白法隠没の時に次い

ほけきよう

だいびやくほう

にほんこく

いちえんぶだい

こうせん

で、法華経の大白法の日本国ならびに一閻浮提に広宣

るふ

うたが

流布せんことも疑うべからざるか。

せんじしよう

(009 撰時抄

こうせんるふ

広宣流布 173 ページ 3 行)

ほとけ めつご かしよう あなん めみよう りゆうじゆ むじやく てんじん ないし

仏の滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親、乃至

てんだい でんぎよう ぐつう さいだい じんび

天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深秘の

しょうほう きようもん おもて げんぜん じんぼう いま まっぼう はじ

正法、經文の面に現前なり。この深法、今、末法の始

ご ごひやくさい いちえんぶだい こうせんる ふ

め五の五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきや

せんじしやう

(009 撰時抄

こうせんる ふ

広宣流布 184 ページ 3 行)

にほんないしかんど がっし いちえんぶだい ひと うち むち

日本乃至漢土・月氏・一閻浮提に、人ごとに有智・無智を

嫌 いちどう たじ 捨 なんみようほうれんげきよう とな

きらわず一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし。

広 いちえんぶだい うち ほとけ めつご

このこといまだひろまらず。一閻浮提の内に仏の滅後

にせんにひやくにじゅうごねん あいだ いちにん とな にちれんいちにん

二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人、

なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきようとう こうえ 惜 とな

南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經等と声もおしまず唱うる

なり。

(010 報恩抄 ほうおんしやう)

こうせんる ふ

広宣流布 261ページー4行)

にほん ちゆうごく ぜんせかい

日本および中国、インド、さらに全世界において、だれかれとな

ぶつぼう りかい

く仏法を理解しているいないにかかわりなく、みんないっしよに、他

なんみようほうれんげきよう とな

ぶつぼう

のことをさしおいて南無妙法蓮華経と唱えるべきです。この仏法

ひろ

ぜんせかい

しゃくそん

は、いまだ弘まっています。全世界のなかで、釈尊がなくなつて

にせんにひやくにじゅうごねん ーあいだ ひとり とな

だいもく

から二千二百二十五年の間、一人も唱えなかつた題目です。ただ

にちれんひとり

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

こえ お

日蓮一人が、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と、声も惜しまず

とな ぶつぼう

に唱えた仏法なのです。

ほつけ しやくぶく ごんもん り は きんげん

つい

「法華の折伏は権門の理を破す」の金言なれば、終に

ごんきよう ごんもん やから いちにん 責 落 ほうおう けにん

権教・権門の輩を一人もなくせめおとして法王の家人と

てんかばんみん しよじよういちぶつじよう な みようほうひと はんじよう

なし、天下万民、諸乗一仏乗と成つて妙法独り繁昌せ

とき ばんみんいちどう なんみようほうれんげきよう とな たてまつ ふ かぜ

ん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば、吹く風

えだ 鳴 あめつちくれ くだ よ ぎ のう よ

枝をならさず、雨壊を砕かず、代は義・農の世となり

こんじよう ふしよう さいなん はら ちようせい じゆつ え にんぽう

て、今生には不祥の災難を払い、長生の術を得、人法

とも ふろうふし ことわりあらわ とき おのおのごらん げんぜ

共に不老不死の理 顕れん時を、各々御覧ぜよ。「現世

あんのん しようもん うたが

安穩」の証文、疑いあるべからざるものなり。

によせつしゆぎようしよう

ほつけ　しゃくぶく　ごんもん　り　は

てんだいだいし　ことば

「法華の折伏は、権門の理を破す」という天台大師の言葉があ

さいご

ごんきよう　しん

ひと

りますから、そのとおり最後には、権教を信じている人びとを、

ひとりのこ

ただ

ぶつぼう

め

ほとけ

みかた

よ

なか

ひと

一人残らず正しい仏法に目ざめさせて仏の味方にし、世の中の人

しょうほう

しん

みようほう

さか

こうせんるふ

とき

がみな正法を信じ、妙法のみが栄える広宣流布の時がきて、す

ひと

なんみようほうれんげきよう

とな

かぜ

おだ

ふ

べての人が南無妙法蓮華経を唱えていくなれば、風は穏やかに吹

ふ

あめ

こうずい

お

むかし

ちゅうごく

ふぎ

しんのう

き、降る雨も洪水などを起こさず、昔の中国の伏羲・神農の

じだい

りそうしやかい

ひと

さいなん

時代のような理想社会となり、人びとは災難にうちまかされること

じんせい

おく

せいめい

ながい

のない人生を送り、生命をまつとうして長生きすることができるよう

ひと

ほう

えいえん

さか

どうり

じつげん

うになります。人も法もともに、永遠に栄えるという道理が実現す

み

らん

とき

げんせ

るそのようなときを、みんなで見てください。その時こそ「現世は

あんのん

きようもん

ことば

じじつ

うたが

安穩である」という経文の言葉が事実となるのは疑いのないこと

です。

しみさんぎようとう　じゃしゆう　す　じつだいじよう　ほけきよう　き

四味三教等の邪執を捨てて実大乘の法華經に帰せば、

しよてんぜんじん　じゆせんがいとう　ぼさつ　ほつけ　ぎようじや　しゆご

諸天善神ならびに地涌千界等の菩薩、法華の行者を守護

ひと　しゆご　ちから　え　ほんもん　ほんぞん

せん。この人は、守護の力を得て、本門の本尊・

みようほうれんげきよう　ごじ　えんぶだい　こうせんるふ

妙法蓮華經の五字をもつて閻浮提に広宣流布せしめん

か。

れい　いおんのうぶつ　どうほう　とき　ふきようぼさつ　がじんきよう　われ

例せば、威音王仏の像法の時、不輕菩薩「我深敬（我は

ふか　うやま　とう　にじゅうしじ　か　ど　こうせんるふ

深く敬う）」等の二十四字をもつて彼の土に広宣流布し、

いっこく　じようぼくとう　だいなん　まね

一国の杖木等の大難を招きしがごとし。

けんぶつみらいき

廣宣流布こうせんるふ

608

ページ
16行

つき にし い ひがし て ひ ひがし い にし て
月は西より出でて東を照らし、日は東より出でて西を照

ぶつぼう

らす。仏法もまたもつてかくのごとし。正像には西より

ひがし

む

まつぼう

ひがし

にし ゆ

東に向かい、末法には東より西に往く。

けんぶつ みらい き

037 顕仏未来記

こうせん る ふ

広宣流布 610 ページー5 行

つき

でかた にし

ひがし

うつ

たいよう

ひがし

で

にし

ほうかく

月はその出方は西から東へ移り、太陽は東から出て西の方角
て ぶつぼう おな しょうほう ぞうほうじだい

へ照らしていきます。仏法もこれと同じで、正法・像法時代に

ちゅうごく

ちようせん

にほん

にし

ひがし

ぶつきよう

つた

は、インド、中国、朝鮮、日本と西から東へ仏教が伝わって

まつぼう

ぎやく

なんみようほうれんげきよう

だいぶつぼう

ひがし

きました。が、末法には、逆に南無妙法蓮華經の大仏法が、東の

にほん しゅつげん
日本に出現して、
にし った
西に伝わり、
ぜんせかい ひろ
全世界へ広まっています。

と 問うて曰わく、い 仏記既にかくのごとし。ぶつきすで 汝が未来記いかなんじ みらいき

ん。

こた

い

ぶつき

じゅん

かんが

すで

のち

答えて曰わく、い 仏記に順じてこれを勘うるに、ぶつき 既に後すで のち

ごひやくさい

はじ

あいあ

ぶつぽうかなら

とうど

にほん

の五百歳の始めに相当たれり。い 仏法必ず東土の日本より

出いずべきなり。

037

けんぶつみらいき
顕仏未来記

こうせんるふ

広宣流布
611ページー1行

きよう　じゆじ　なんみようほうれんげきよう　とな　たてまつ

されば、この経を受持して南無妙法蓮華經と唱え奉る

べしと見えたり。^み

やくおうほん　のち　ごひやくさい　うち　えんぶだい　こうせんるふ

薬王品には「後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、

断絶せしむることなけん」と説き給い、天台大師は「後の^{のち}

五百歳、遠く妙道に沾わん」と釈し、妙楽大師は「し^{のち}

ばらく大教の流行すべき時に抛る」と釈して、後の^{のち}

五百歳の間、に法華經弘まつて、その後は、閻浮提の内に^{のち}

絶え失せることあるべからずと見えたり。^{のち}

絶え失せることあるべからずと見えたり。^{のち}

絶え失せることあるべからずと見えたり。^{のち}

絶え失せることあるべからずと見えたり。^{のち}

絶え失せることあるべからずと見えたり。^{のち}

絶え失せることあるべからずと見えたり。^{のち}

ほつけしよしんじようぶつしよう

広宣流布こうせんるふ

693

ページ7行

てんじくこく がつしこく もう ほとけ しゅつげん たも な

天竺国をば月氏国と申す、 仏の出現し給うべき名なり。

ふそうこく にほんこく もう しょうにん たま つき

扶桑国をば日本国と申す、 あに聖人出で給わざらん。 月

にし ひがし む がつし ぶつぽう ひがし なが そう

は西より東に向かえり。 月氏の仏法の東へ流るべき相な

ひ ひがし い にほん ぶつぽう がつし 還

り。 日は東より出ず。 日本の仏法の月氏へかえるべき

ずいそう つき ひかり 明 ざいせ はちねん

瑞相なり。 月は光あきらかならず。 在世はただ八年な

ひ こうみよう つき まさ ご ごひやくさい なが やみ て

り。 日は光明、 月に勝れり。 五の五百歳の長き闇を照ら

ずいそう

すべき瑞相なり。

(050) 諫曉八幡抄

かんぎようはちまんしよう

こうせんるふ

広宣流布 747 ページ 11 行

てんじくこく

がつしこく

ほとけ しゅつげん

天竺国（インド）を月氏国といいますが、これは、仏が出現す

くに な

ふそうこく にほんこく

しょうにん

べき国の名です。扶桑国を日本国といいます。どうして聖人が

しゅつげん

つき でかた にし ひがし む

出現しないわけがありました。月は出方が西から東へと向か

ぶつぽう どうほう るふ

います。それはインドの仏法が東方へ流布していくさまをあらわし

たいよう ひがし で にほん ぶつぽう

ています。太陽は東から出ます。これは、日本の仏法がインドおよ

ぜんせかい

ずいそう

つき ひかり あか

び全世界にかえっていく瑞相（しるし）なのです。月は光が明るく

ほけきよう しやくそんざいせ はちねんかん て

ないように法華経はただ釈尊在世の八年間を照らしたただけでした。

たいよう かがや つき すぐ ごごひやくさい まつぽうまんねん

太陽の輝きは月に勝れており、これは五五百歳、末法万年の

みらいえいごう

やみ て ずいそう

未来永劫にわたって闇を照らしていく瑞相です。

ひつきよう

こうせんるふ

じゅういちじよう

「畢竟」とは広宣流布なり。「住一乗」とは、

なんみようほうれんげきよう

いつぼう

じゅう

南無妙法蓮華經の一法に住すべきものなり。

おんぎくでん

(095 御義口伝

こうせんるふ

広宣流布

1074

ページー7行)

ほけきよう えんぶだい ぎよう
この法華經を閻浮提に行ずることは、普賢菩薩の威神の

ちから よ
力に依るなり。

きよう こうせんる ふ
この經の広宣流布することは、普賢菩薩の守護なる

べきなり

おんぎくでん
(095 御義口伝

こうせんる ふ
広宣流布 1085 ページ 2 行)

ほけきよう ぜんせかい ぎよう
この法華經を全世界に行じていくことは、普賢菩薩の力に

きよう さんだいひほう なんみようほうれんげきよう こうせんる ふ
よるのです。この經 (三大秘宝の南無妙法蓮華經) が広宣流布

ふげんぼさつ しゅご ちから
するのは、普賢菩薩の守護の力によるのです。

ついでに
いちはんぶだい
こうせんるふ
終には一閻浮提に広宣流布せんこと一定なるべし
いちじよう

おんこうきがき
096 御講聞書

こうせんるふ
広宣流布
1135 ページ 5 行

にちれん ふしようふじよう

たとい、日蓮、死生不定たりといえども、妙法蓮華經の

ごじ るふ うたが

五字の流布は疑いなきものか。

ときどのごへんじ きようもんふごう こと

(125 土木殿御返事 (經文符合の事))

きょうもんふごう

広宣流布 1298 ページ 10 行

1298 ページ 10 行

いま にちれん とき かん ほうもんこうせんる ふ
今、日蓮が時に感じて、この法門広宣流布するなり。

160 さんだいひほうほうじょうじ さんだいひほうじょう
(三大秘法稟承事 (三大秘法抄))

こうせんる ふ
広宣流布 1388 ページ 8 行

いま にちれん とき かん さんだいひほう こうせんる ふ
いま日蓮がその時であると感じて、この三大秘宝を広宣流布する
のです。

しょうぞうにせん

にし

ひがし

なが

ぼげつ

せいこう

はじ

正像二千には西より東に流る。暮月の西空より始まるが

まつぼうごひやく

ひがし

にし

い

あさひ

とうてん

ごとし。末法五百には東より西に入る。朝日の東天より

い

出ずるに似たり。

そやにゆうどうどのもとごしよ

162 曾谷入道殿許御書

こうせんるふ

広宣流布

1407

ページー16行

春のせんり草満そうら少

はるの野の千里ばかりにくさのみちて候わんに、すこし

まめひ草放いちじ

きの豆ばかりの火をくさひとつにはなちたれば、一時に

むりようむへんひ

無量無辺の火となる。

さじきのようにぼうごへんじむりようむへんくどくこと

(249 棧敷女房御返事 (無量無辺の功德の事)

こうせんるふ

広宣流布1704ページー16行)

にほんこく なか いちにん なんみようほうれんげきよう とな

日本国の中にただ一人、南無妙法蓮華經と唱えたり。これ

しゅみせん はじ いちじん たいかい はじ いちろ ににん

は須弥山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。二人・

さんにん じゅうにん ひやくにん いっこく にこく ろくじゅうろつかこく しま

三人・十人・百人、一国・二国、六十六箇国、すでに島

ふた およ いま ぼう ひとびと とな たも

二つにも及びぬらん。今は謗ぜし人々も唱え給うらん。ま

かみいちにん しもばんみん いた ほけきよう じんりきほん

た上一人より下万民に至るまで、法華經の神力品のごと

いちどう なんみようほうれんげきよう とな たも

く、一同に南無妙法蓮華經と唱え給うこともやあらんずら

ん。

みようみつしょうにんごしょうそく

(251) 妙密上人御消息

こうせんるふ

広宣流布 1711 ページ 12 行

にちれん

にほんこく

ひとり

なんみようほうれんげきよう

だいもく

とな

(日蓮は) 日本国でただ一人、南無妙法蓮華經と題目を唱えた

しゅみせん

おお

やま

さいしよ

いち

のです。このことは須弥山という大きな山をつくつてゐる最初の一

じん

おお

うみ

さいしよ

いつてき

みず

おな

ふたり

さんじん

塵であり、大きな海の最初の一滴の水と同じです。二人、三人、

じゆうにん

ひやくにん

いつこく

にこく

ろくじゆうろく

こく

にほんじゆう

ひろ

十人、百人、一国、二国、六十六か国(日本中)まで弘ま

いき

つしま

いま

にちれん

り、壱岐、対馬にまでおよんでゐてありましょう。今では日蓮を

ぼう

ひと

だいもく

とな

にほん

くに

うえ

謗じていた人たちも題目を唱えてゐるでしょう。また日本の国の上

さいこうけんりよくしや

した

しよみん

ひと

ほけきよう

は最高権力者から下は庶民にいたるあらゆる人びとが、法華經

じんりきほん

と

いちどう

こえ

あ

神力品で説かれてゐるように、かならず一同に声を合わせて

なんみようほうれんげきよう

とな

南無妙法蓮華經と唱えるときがくるでありますよう。

にちれんいちにん

なんみようほうれんげきよう

とな

ににん

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱えしが、二人・

さんにん

ひやくにん

しだい

とな

伝

みらい

三人・百人と次第に唱えつたうるなり。未来もまたしか

じゆぎ

るべし。これ、あに地涌の義にあらずや。あまつさえ、

こうせんるふ

とき

にほんいちどう

なんみようほうれんげきよう

とな

広宣流布の時は、日本一同に南無妙法蓮華経と唱えんこと

だいち

まと

は、大地を的とするなるべし。

しよほうじつそうしよう

(280 諸法実相抄

こうせんるふ

広宣流布 1791 ページ 10 行)

さいしよ

にちれん

だいしようにん

ひとり

なんみようほうれんげきよう

とな

最初は日蓮（大聖人）ただ一人が、南無妙法蓮華経と唱えて

ふたり

さんにん

ひやくにん

とな

つた

いたのが、二人、三人、百人と、しだいに唱え伝わってきたので

みらい

じゆ

す。未来もまた、そうなることでしよう。これこそ「地涌」というこ

こうせんるふ　とき

んほんこくじゆう

とではないでしようか。そのうえ、広宣流布の時には、日本国中が

なんみようほうれんげきよう　とな

だいち　まと

ゆみ　い

そろって南無妙法蓮華經と唱えることは、大地を的にして弓を射れ

あ　ぜったい　まちが

ばかならず当たるように絶対に間違いないことなのです。

だいあく

だいぜん

きた

ずいそう

いちえんぶだい打

乱

大悪は大善の来るべき瑞相なり。一閻浮提うちみだすなら

えんぶだいない

こうりようるふ

えんぶだい

うち

ひろ

るふ

ば、「閻浮提内、広令流布（閻浮提の内に、広く流布せし

うたが

そうら

む）は、よも疑い候わじ。

（363 減劫御書

げんこうごしよ

こうせんるふ

広宣流布

1969

ページー6行

いんが 理 はな み
そもそも因果のことわりは華と果とのごとし。

せんり の か くさ はたるび ひ ひと つ

千里の野の枯れたる草に螢火のごとくなる火を一つ付け

しゆゆ いっそうにそう じゆう ひやく せん まんそう 付 渡

ぬれば、須臾に一草二草、十・百・千・万草につきわた

燃 じつちようにじつちよう そうもくいちじ 焼 尽 りゆう

りてもゆれば、十町二十町の草木一時にやけつきぬ。竜

いったい みず て い てん のぼ さんぜんせかい あめ

は一滴の水を手に入れて天に昇りぬれば、三千世界に雨を

降 そうろう

ふらし候。

にいけどのごしようにそく

399 新池殿御消息

こうせんる ふ

広宣流布 2056 ページ 9 行

くに
国はいかにも候え、法華經のひろまらんこと疑いなかる
そうら
べし。
ほけきよう
うたが

(
422 大果報御書
だいかほうごしよ

こうせん
ふ
広宣流布
2144
ページー14行

だいじ しょうずい

だいあく 起

だいぜん 来

大事には小瑞なし。大悪おこれば大善きたる。すでに、

だいほうぼう くに

だいしょうほう

かなら

広

大謗法、国にあり。大正法、必ずひろまるべし。

だいあく だいぜん ごしょ

(423 大悪大善御書

こうせん る ふ

広宣流布 2145 ページ 6 行)

おお

おお

ちい

ぜんちよう

す

だいあく

大きなことが起きるときには小さな前兆では済みません。大悪

お

だいぜん

だいほうぼう

くに

が起こればかならず大善はやってくるのです。すでに大謗法が国に

じゅうまん

つき

だいしょうほう

ひろ

充滿しているのですから、次は大正法がかならず弘まってい

ちがいありません。